
22ジョーカー

蜂夜エイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

22ジョーカー

【Nコード】

N2516Y

【作者名】

蜂夜エイト

【あらすじ】

ジョーカーマシンと呼ばれる人型駆動兵器を用いた“第三次世界大戦”。その戦役で“英雄”と呼ばれた男は、戦争が終わると同時に隠居してしまう。

時は流れ、半年後。“英雄”の隠居する屋敷に望まれざる来客が訪れた。

見たことの無いジョーカーマシンと共に現れた女、フェアリア。そして、それを追う謎の組織。

“英雄”、リヒト・シュッテンバーグは再び戦うことを決意する。

全てを知るために、そして抗うために。

見所は中学二年生の能力が付加されたロボット。多分魔術系統のロボット寄り。タロットとか知っているとニヤニヤ出来る、と思う。

プロローグ

焦土と廃墟が立ち並ぶ、土色の戦場。
彼はそこに立ち、最期の音を聞いた。

『――戦！停戦協定が結ばれました！』

電子ノイズと共にその言葉を伝えるスピーカー。
荒れ果てた戦場に一人佇む男は、静かにそのスイッチを切った。
狭いコックピットの中で、自嘲気味に笑顔を浮かべる。

「やれやれ、人殺しは御役御免か。意外と早かったな」

その皮肉に答える者は居ない。

何故なら、彼の周りには既に生きている存在が居なかったためだ。
あるのは焼け焦げた土地と、砕けた鉄色の破片。

それは、ジョーカーマシンと呼ばれた人型駆動兵器の残骸である。
味方を識別するためのカラーバリエーションも、全てが炎により
橙色に染まっていた。

「世界大戦も終り、俺は無職……」

世界に齎された新たな技術と要素によって生み出されたジョーカーマシン。

それは世界に第三次世界大戦を引き起こした。

しかし、それも最早過去の事。

今は、何も考えていなかった明日の食い扶持を如何にするかで頭が痛い。

「やれやれ——つと、通信か」

それは旧知の仲であり、今は別の戦場に居る筈の仲間からのものであった。

しかも、同時に二つ。

苦笑しながらも通信機器のスイッチをオンにすると、途端にけたたましい歓声が聞えてきた。

最も、それはノイズのような音であることから、バックグラウンドミュージック代わりの喧騒なのであろう。

『——リヒト。生きてるか？』

『リヒト、大丈夫う？ 頭打って馬鹿になってたりしなあい？』

二人の言葉に、リヒト、と呼ばれた男は苦笑。

馬頭文句の一つでも吐いてやろうと、静かに笑みを湛えた。

「五月蠅え、テメェら揃いも揃って……」

『だって、ねえ……？』

『“英雄”最期の任務地だろう。ハイにでもなっているかと』
「酷えな」

ぼやきながら、リヒトはウインドウパネルを操作する。

手馴れたもので、彼の乗った人型駆動兵器は背部のバーニアを噴かせ始めた。

『そういえば、“英雄”さんはこの後何するのかしらあ？あ、私のところに永久就職ってのは——』

「勘弁してくれ。頼む。それだけは死んでも嫌だ」

『しかし、実際お前は傭兵のようなもの。戦争が終われば、食い扶持はゼロだぞ？』

「そうさな」

ぶっきら棒に返答しながらも、自動操縦の期待の中で思案顔を浮かばせる。

ふと、アイカメラ越しに外を見ると、綺麗な夕焼けが見えた。大戦の終りに見たそれは、世界の終焉のようだった。

「隠居でもすつか？」

『お前が隠居だと？』

折り返し、驚きの声上がる。

相手はめったに驚かない性分の人間だったので、その姿に新鮮味を感じた。

「赤い屋根の別荘でも作って。そうだな、立地は森が良い。ボツンと、一人で住む」

『やーん、素敵』

「だろ？」

『皮肉だ。気づけ』

不敵に笑みを浮かべて、リヒトは戦場を飛んだ。

これが“英雄”の最期の飛行になると、誰もが信じていた——

第三次世界大戦終結。

勝者である連合国は敗者への裁きを下し。

世界の全てを巻き込んだ、最大規模の“冷戦”が始まろうとしていた。

「ククク……素晴らしい、な。この力は……!!」

その中で暗躍しようとする者の存在を、まだ、誰も知らない。

プロローグ（後書き）

初めましてでございます、蜂夜エイトです。

厨二病能力ロボットバトルを予定しております。

拙作でございますが、暇つぶしとなればこれ幸いと。

第一話 美女と英雄

森の中に、その屋敷はポツリと立っている。

夕焼けのように赤い屋根に、中央に聳える不釣り合いな尖塔。

広大な庭を持ち、周囲の森は様々な生き物たちが生息している。

それは決して、この世の楽園と言っても過言では無いだろう。

しかし、この建物に普通の人間が立ち寄る事は無い。

それは決して立地条件が悪いとか、ましてや、人が住んでいないといったことでもない。

彼らは恐れているのだ。

この館の主を。

第三次世界大戦中、“英雄”と呼ばれた男のことを。

だから、彼はここに住んだ。

妙な損得目線や、倦厭、好奇の目から逃れるために。

ここを訪れることが出来るのは、日の光と鳥のさえずり、旧知の友。

それと、望まざる来訪者のみである。

「……しつこい奴だ」

森の中を疾駆する影。

長い白髪を靡かせて、黒いコートを身に纏い走る女。

悪路であろう獣道もなんのその、軽業師のような身のこなしだ。

「余りにしつこい男は嫌われるぞ。雑誌に載っていた」

軽口を飛ばしながら、切れ長の瞳で背後を流し見た。

そこにあるのは遠近感を無視したかのように聳える鉄の巨人。

平和なこの森に、余りにも似つかわしくない存在。

ジョーカーマシン・ソードだ。

一対のアイカメラは獲物を常に捕らえ、睨み続ける。

灰色の巨軀は同じく灰色の装甲で覆われ、剛なる印象を受ける。

しかし、その背部にある巨大なバーニアが飾りである筈も無い。

突然、巨人がその拳を握り込んだ。

武装を持たない拳であろうと、人間にとっては一撃で致命傷となる。

だが、それに易々と当たるほど女も甘くは無かった。

素早く横に転がり、何事も無かったかのように逃走を再開する。

「お粗末な操作だ。折角の第二世代機なんだから、もっと努力すべきだろう？」

その機体は機動力と攻撃力に優れた機体であったが、流石に人間を相手取る設計はされていないらしい。

仕方ないこと、とも言えるだろう。

だが、灰色の巨人は突然その両拳を握り込んだ。

まるで祈りのように組まれた拳骨は、一撃の下に女を粉碎する、という気概。

それは、余りにも隙だらけの一撃。

女の隣で、轟音と衝撃。

「地面を叩いてどうする？ 全く、手が抜けないようだが」

女の皮肉に反応すること無く、巨人はその握ったままの両拳を抜こうと奮闘していた。

両腕の肘関節部分まで埋っていて、簡単には取れそうには無い。

「それでは、去らば」

女は捨て台詞を残すと、暗緑色の森に消えるように姿を消した。目標は既に、先ほどから見えている。

この分ならば数分で辿り着くことが出来るだろう。そこからは――

「彼次第、か……」

逡巡するような瞳。

だが、頭を振る。

まずは、全てを知らせなければならぬのだから。

“選択”は、“選択肢”が無ければ選択できない。

「オルタ。ハインリツヒ。リヒト……！」

それは名前か暗号か。

誰にとも無く呟かれた言葉が風に乗って消えると同時に、彼女の目の前に屋敷が現れた。

赤い屋根に、尖塔が特徴的な屋敷だ。

＊

＊

＊

汚い部屋に、轟音が響いていた。

整理整頓などとは無縁の、積み上げられた本の塔が震動で崩れる。その麓で眠っていた男の後頭部に、本の角が直撃する。

「……んあっ!？んだよ!？」

間の抜けた声を上げながら、眠っていた男は飛び起きる。

周りを見回し、自分の頭を襲った犯人を知ると、嘆息してそれを除けた。

少しだけ広くなった栗色の長机に、再び頭を突っ伏せる。

もう一寝入りしようと考えた彼に、再び震動が襲った。

覚醒状態ならば、それは確かに知覚できる程度の揺れである。

「———たく、寝てらんねえ。何処のどいつだ、揺らしてんのは」

元軍人である彼には、この揺れの正体が分かっていた。

地響きと共に遅れてやってくる、重い震動波。

大方、爆薬による爆破のものと考えていた。

確かに危険度言えば同等ではあるが———彼は、その正体を知ることには無い。

「この近くには鉱山も地雷原もねえ筈なんだが……」

緩慢な動作で立ち上がる。

ぼやきながら、油っぽい黒髪を掻いた。

だらしなく伸びたそれが、鳶色の薄暗い瞳を隠す。

近くの椅子の背もたれに掛けてあった暗緑色のコートを着込んだ。

彼はそのまま、その部屋を出た。

この地鳴り騒動の正体を探るために。

今居た史書室から、玄関までは遠くない。

空気の冷えた廊下で、彼は背中に走る寒気を感じていた。

寒さからくるものではない。

明らかに、本能からの警告の類。

だが、それでも彼は進む。

安眠を妨害されたことへの怒りと、好奇心が半分ずつの心象で。

洒落た装飾の施された玄関扉を開け、彼はそれを見る。

「――は？」

目の前には、長い白髪を乱した美女が居た。

真っ黒なコートを筆頭に、ご丁寧にも全身を黒で覆っている。

切れ長で山吹色の瞳は相手を見抜き、威圧感と、異彩を放っていた。

そんな女が、

「搜したぞ。リヒト・シュッテンバーグ」

などと言ったのだから、彼は驚く。

「はあっ!？」

「もう、来たか。随分と遅かったようだな」

だが、それだけではない。

女の後ろに、鉄色の機械巨人を見た。

「はアあああああああああ——っ!？」

素っ頓狂な絶叫を上げて、彼は。

——“英雄”リヒト・シュッテンバーグは驚きの瞳目をした。

＊

＊

＊

薄暗い森の中、一人の男が座っていた。

傍らには巨大な黒の物体が鎮座しており、それは高く、男に影を落としていた。

「ヒヤハハ、マヌケの“贄”がようやく追いついたか！」

心底楽しそうに、男は下品な笑い声を上げた。

彼が目を落としているのは、地面に直接置かれた携帯電話のモニター。

そこに映される映像は彼が“贅”と呼んだジョーカーマシンのメ
インカメラと繋がっている。

「それにしても、随分とヒョロい野郎だなア。あんなんで“アル
カナ”に乗れんのか？」

眉を寄せて男は言った。

だが、その疑問を振り払うが如く、男は己の頭を叩いた。
それはまるで、自らに気合を入れるような仕草である。

「一丁揉んでやるか……ま、揉む、で済めばいいがなア」

くつくつと笑いながら、男は立ち上がる。

傍にある黒い巨大な物体の脚を愛しそうに撫でた。

置かれたままの携帯電話から轟音が響いた頃、彼はその脚の後ろ
へと姿を消す。

その姿を見届けた者は、誰も居ない。

＊

＊

＊

目を忙しなく開閉し、口は半開き。

肩を掴もうとした手は宙でふらふらと彷徨っている。

リヒトの驚き様は、“英雄”とは思えないほどのものであった。

「悠長に説明している時間は無い。私の言うことを聞け。質問は手を挙げて、三回まで可能だ」

「まず、お前の所属と階級、あと名前は!？」

「所属は言えない。階級は無い。名前はフェリアだ」

白髪の女――フェリアは淡々と答えた。

それは聞き手によつては、まるで感情が抜け落ちたかのように冷たい声音だろう。

「じゃあアレは一体――」

「質問は三回まで、と言っただろう？」

「さっきで終りかよ!？」

などと、即席コントを続けるリヒトはそこまで頭が回らなかったようだ。

兎に角、彼らは窮地に立たされている事に違いない。

視界を塞ぐように聳え立つジョーカーマシンは、間違いなく標的をフェリアに定めていた。

「――って、コントしてる場合じゃねえ! どうすんだ!？」

「焦るな。手はある」

落ち着き払ってフェリアは言った。

「アレに対抗するためには同等の力が居る。つまり、ジョーカーマシンだ」

「そうだな」

「で、だ。詰る所君がジョーカーマシン並みの活躍をすれば……」
「出来るかつ!!」

ぜえぜえと息を吐いて、リヒトは恨めしげにフェリアを見る。
当の本人は涼しげに、からかう様に笑っていた。

が、ジョーカーマシンの足音が聞えたとき、その目を鋭く尖らせ。

「冗談はここまでだ。生きなければ、私の言うことを聞け。いいな？」

「……おう」

その剣幕に、リヒトは圧された。

まるで親の敵でも見るかのような目でジョーカーマシンを見上げたのだ。

「自動操縦でここにジョーカーマシンを呼んである。君はそれに乗って戦え」

「到着まではどうすんだよ？」

「私が時間を稼ぐ」

言い放ち、リヒトに背を向けた。

人間がジョーカーマシンと対峙するなど、前代未聞である。

確かに人対ジョーカーマシンという光景は、過去、戦場では度々見られたが――

「無茶だ。死ぬに決まってるだろ？ テメエ馬鹿か？」
「死なない」

その根拠の無い言葉。

そして、振り返ったフェリアの瞳に、再び圧された。

先ほどまでとは全く違う。

それは一種の、覚悟の輝きであった。

まるで、戦友の背を護るような。

そんな“圧”を、フェリアの瞳は発していた。

「……………」

無謀。

余りにも無謀なその行為に、でも、リヒトは言う。

「……なら、俺が来るまでに倒されないようにしておけよ。心中は御免だ」

「無論」

その覚悟を無碍にすることなど、リヒトには出来無かった。

軽口を叩きながらも、再び、その瞳を見つめた。

覚悟の籠った瞳には、同じく、覚悟を込めた瞳で返す。

互いが互いの意思を確認し、僅か一秒。

二人は既に、全ての意識を“二人での勝利”へと向けていた。

「場所？」

「屋敷の裏へ回れ。そこに現れるだろう」

リヒトは言われるがままに屋敷の裏へと駆けて行った。

それを見送り、フェリアはゆっくりと振り向く。

先ほどまでの鬱憤を溜め込んだ、凶悪かつ強大な敵が居た。

質量差は歴然。

フェリアが手に握るのは、豆鉄砲にもならない拳銃だけ。

——だが。

彼女の頭には、“負ける”という言葉は浮かんでこなかった。

「さて、戦おうか」

*

*

*

屋敷の裏庭。

色とりどりの花が咲く花壇があり、リヒトの密かな趣味である家庭菜園もある。

いつ来ても癒される空間であったが、今のリヒトにとってもそれは同様であった。

「しかし、一体何なんだ？ フェリアとか言うあの女、怪しすぎる」

癒され、落ち着いた影響だろうか。

気が動転していたため浮かばなかった疑問が、次々と浮かび上がる。

何故、フェリアは追われているのか。

何故、フェリアはここへと来たのか。

何故、ジョーカーマシンを持っているのか。

疑問は尽きない。

しかし、その疑問を吹き飛ばすようにリヒトは頭を振る。
今は、生き残るための。

そして、フェリアを助けるためにも、勝つことだけを考えるときである。

密かな決意を新たにした瞬間。

「――ッ！！」

轟音。

衝撃。

砂煙。

三つの要素が辺りを襲い、リヒトも例外なくそれを受けた。
幸いにも、身体に影響は何も無い。

砂煙が晴れば、自動操縦で飛んで来た件のジョーカーマシンがある筈である。

リヒトが、黒いシルエットの奥の機体を視認した。

「これが……！」

まず目に付く事は、その小ささだった。

通常のジョーカーマシンに比べ、一回り小さい。

18メートルほどが一般的だから、この機体は12メートルかそこらか。

暗緑色のなだらかな装甲は、風の影響を極限まで減らすためのものなのだろう。

風を切るようにしなやかな肢体は、歴戦の格闘家を髭髯とさせる。
両腕両脚から伸びた鉄色のバイパスは一体何に使うのだろう。
リヒトの興味は尽きない、が。

「まずは、一刻も早く助けに行かねえとなんねえんだ。乗せてくれよ、“切り札”」

赤い瞳が、リヒトを射抜く。

まるでパイロットを品定めするかのような瞳。

だが、リヒトはそれに臆する事は無かった。

堂々とその胸を張り、静かに一歩踏み出す。

呼応するかのように、機体背部のコックピットが露出された。乗れ、とでも言うというのか。

「生意気なマシンだ。だが、俺には調度良い」

呟いて、リヒトは滑り込むようにコックピットへと入った。

それなりに狭い機体内部は、通常のジョーカーマシンとの相違は無い。

ウィンドウパネルを手早く操作し、ジョーカーマシンの戦闘状態起動へと移行する。

「これなら操作出来そうだ……っと。こいつは、パイロット登録か」

画面一杯にでかでかと現れたウィンドウは、パイロットの名前を要求していた。

リヒトは素早く、“リヒト・シュッテンバーグ”と打ち込む。

認証されると同時に、彼の元に新たなパネルが現れた。

それは、この機体を示す固有名詞。

「――Arcana Machine 04 Grinder.
“粉碎機”、か」

何回か、呟く。

その名がしっくり来たのか、リヒトは躊躇い無くフットペダルを踏んだ。

同時に操作する手の中のレバーで、忙しなく機体制御を行う。
ジョーカーマシン

“切り札”改め、“グラインダーGrinder”は、その場に堂々と立ち上がった。

「元第十五遊撃部隊隊長、リヒト・シュッテンバーグ。階級は元陸曹。あー、つと。あとなんかあったかな……」

おどけた調子で、リヒトは言う。

そこに、戦場に対する恐れや不安は一つも無い。

彼の頭に“勝ち”以外の未来は、一つとて存在しなかった。

「——まあいい！コードネーム“グラインダー”、行くぞ！」

第一話 美女と英雄（後書き）

次回バトルが出来ると思います。
そこまで大したモンじゃあない気もしますが。

第二話 全力前進

咄嗟に、前へと飛び込んだ。

背中を撫でるような圧倒的プレッシャーが、一瞬送れてその場を穿つ。

土埃を払うような暇も無い。

そんなことをしていれば、次に訪れるのは“死”のみだ。

「くっ……!!」

最早、軽口を飛ばすような余裕も無い。

フェリアの美しかった白髪は土埃で汚れ、珍しく焦りの表情を浮かべていた。

「全く、次から次へ……っ!!」

言った傍からフェリアは横へと飛ぶ。

再び、真上から落とされたジョーカーマシン・ソードの拳。

地面を穴だらけにしながらも、その狙いは次第に定まってきていた。

まるで、“次は捕らえる”とでも言うように、ソードの目が光った。

「貴様如きに盗られるほど易くは無いぞ」

だが、彼女の動きにも限界があった。

いくら体力に自身が在ろうとも、もう横へも、後ろへも、前にも

跳べない。

四方を完全に穴で囲まれた。
一度穴に落ちてしまえば、二度と日の光を浴びる事は叶わないだろう。

だが、彼女は最期まで信じていた。
命を託した、男の存在を。

だから。

この局面でも、その瞳に籠った闘志は消えない。

アイカメラ越しにそれを見たソードのパイロットは、恐怖した。
それはまるで、肉食獣を目の前にした小動物のように。
食物連鎖にも似た、本能からの恐怖。

だから、ソードは——躊躇い無く、拳を振り下ろした。

『——!!』

最初に気付いたのは、ソードのパイロットであった。
明らかに地面よりも高空の位置で、振り下ろしたはずの拳が浮いている。

まだ腕が直角を描いており、力が地面に伝わった様子など微塵も無い。

ならば、拳と敵の間にある物体は何なのか——

『教えてやろうか？三流パイロット』

『……っ!？』

『こいつはグライNDER。テメエをぶちのめす為の秘密兵器って
トコロか』

初めて、掠れた呼吸音のような音が漏れた。

息を呑んだのか、息が詰まったのか。

ただ、ソードのパイロットは間にある物体からの通信を聞いていた。

『よお、フェリア。生きてるか？』

「遅すぎるぞリヒト。危うく死に掛けた」

『死なねえって言ったのは何処のどいつだよ』

グラインダーの集音マイクとスピーカーで、リヒトは会話していた。

無論、この間にもソードはグラインダーを叩き潰そうと力を込め続ける。

しかし、潰れない。

それどころか、少しずつ押し返しているようだった。

この小柄な機体の何処に力が――

ソードのパイロットがそう考えたとき、一段と激しい揺れがソードを襲った。

狙っていた場所には、豆粒のような小ささのフェリアのみ。

気付いたときには既に、機体がダメージを受けている。

腰部装甲破損――

『グラインダーの特技は急襲、翻弄。テメエのスピードじゃあ一億光年掛かっても追いつけない』

「リヒト、光年は距離だ」

『分かってる！冗談を察しろ！』

戦場において相応しくない会話は、ソードの後ろから発せられていた。

振り向き様に、裏拳を叩き込む。

だが、それは当たらない。
アイカメラには何も映ってはいないのだから。

『よそ見してたら——』

リヒトの声。

方向は四時——

『……こうなった』

右脚部破損。

ソードのコックピットに赤いサイレンと警戒音が鳴り響く。
アラート、アラート、アラート。

「調子に乗るのはいいが、さっさと終らせてしまえ。誰かに見られたら面倒だ」

『こんな森に誰も来ないだろ、っと』

会話しながらも、左腕にダメージを与えた。
最早どんな攻撃かすらも理解できない。

考える内に、今度は左足。

影も形も見えない。

武器は何か、どんな手段で移動しているのか。

それすらも、理解できない。

人知を超えた脅威の性能に、ソードのパイロットは考えることを放棄した。

『もう動かねえのか？根性のねえヤツだな』

「気づけ。もう殆どイモムシ状態だ」

そう、残ったのは既に右腕だけ。

その右腕すらも、風のような機体に掠め取られる。

思考を放棄した視界の中で最期に見つけた、その光景。

暗緑色の悪魔が、在り得ないほどの速度で右腕を力任せに引き千切る。

武器など一切無い。

グライNDERは、素手で、ジョーカーマシンを解体して見せた。

*

*

*

「――で、だ」

リヒトは思い詰めた顔で唸った。

「何で、テメエは平然と、コックピットに乗ってやがる？」

「外は危険だからに決まっているだろう。それに、この機体は元々私の物だ。私が乗っても不思議ではあるまい」

当然だ、とでも言うようにフェリアが言う。

パイロットシートの後ろ、僅かに開いたスペースにフェリアは立っていた。

コックピットは狭く、二人が入るには両者の身体を密着させなければならぬ。

「じゃあ俺は降りる。手をどけろ」

「生憎、今は操縦できないのでな。このまま乗っついて貰おう」

拳句、手を肩にまわしてがっちり固定されている。

このままでは抜け出す事は適わない。

「今は操縦できないって、どういふことだよ……」

げんなりと呟きながら、リヒトは諦めてモニターを眺めた。

先ほど破壊したジョーカーマシンからパイロットが降りてくる気配は無い。

恐らく内部の衝撃で頭を打ったか、気絶でもしているのだろう。これ幸い、とばかりにリヒトは問いかける。

「取り敢えず、聞かせてもらおうぞ。このマシンと、テメエと、それらを狙ってる組織についてだ」

「組織……か。いつ、気付いた？」

「ジョーカーマシン・ソード。第二世代機か？こんなモン、一人や弱小組織が用意できる訳ねえだろ」

ジョーカーマシンは戦場において強大な武力となる。

が、反面、それは国家レベルでなければ用意できないほどの代物でもある。

この国ではジョーカーマシンを個人が持つ事は未だ禁止されている上、組織レベルとなってもそれは嚴重に制限、管理されているのだ。

特に、戦時後期に開発された“第二世代ジョーカーマシン”など、

以ての外。

一般レベルでジョーカーマシンを拝むには、内戦や紛争の起こっている地域にある一世代前のものを見なければならぬだろう。

「ふむ……成る程な。頭は悪くないらしい」

「俺を馬鹿にしてんのか。これくらいジュニアスクールの洩垂れでも分かるわ」

「いいだろう。リヒト・シュッテンバーグ。貴様に真実を伝えよう。ただし……」

「まさか、“知ったら二度と引き返せない”とでも言うつもりか？」

リヒトの釘を刺す言葉に、フェリアは返事を返さない。だがその沈黙は雄弁にそれを語っていた。

「一つ、言っておく。引き返すかどうか決めるのは俺だ。テメェに心配されるほど落ちぶれてねえよ」

「そうか。自信満々だな」

「俺はいつでも、どこでも、何でも出来るんだよ」

その言葉は不器用なりヒトなりの優しさであったが、フェリアはそれに気付く素振りも無い。

一呼吸置いて、フェリアは口を開く。

「第三次世界大戦の裏で暗躍していた組織がある。その名は――」

『デイブレイク』

若い男の声。

フェリアの言葉を継いだのは、点けっ放しだったグライNDERの通信装置だった。

『ってんだ。どうよ？カッケーだろ？』

「……誰だ？」

「久しいな、ファウスト戦闘員」

『今はもう戦闘隊長だぜ？ちょーっち情報が遅えなア』

フェリアが通信を介して、ファウストと名乗った男と会話する。会話からは余り良好な関係とは思えない。

「戦闘隊長……っ!？」

『そゆこと。サインは全てが終わった後にしてくれよ?』

フェリアが明らかに狼狽した。

リヒトは顔を動かすことは出来ないが、肩に触れていた手が微かに震えたのを感じる。

「どうした、フェリア。何かマズイのか？」

「リヒト。お前の機体はかなり特別。それは分かるな？」

「そりゃ、分かるけどよ……?」

リヒト自身、グライNDERのハイスpekさは自覚していた。

オーパーツと呼んでも差し支えないほどの性能だ。

所々は魔法でも使っているのでは無いか、と疑いが掛かる。

「今乗っているグライNDER……これと同等の力を持つ機体が、今、こちらに向かっている」

「なっ!？」

リヒトは驚きの声と共に、備え付けられたレーダーを見た。周囲一キロにはジョーカーマシンの反応は見られない。だが、リヒトは確実に予感していた。強敵の登場と、それに伴う絶望的な窮地というものを。

「――ッ!？」

メインモニターを見たりヒトは目を見開く。

目の前の、何も無いはずの空間が、ひしゃげた。

その隙間を挟じ開けるかのように、薄暗い灰色の腕が姿を現す。余りにも非常識な光景。

濃灰色の機体は、空間を挟じ開けている。

『到着、つと』

戦場に似つかわしくない、余りにも軽い声。

同時に、ファウストの機体はその姿を晒した。

大きさはリヒトの乗るグライNDERの二倍ほどはあり、圧倒的な質量差を見せ付ける。

両手には銃器、背中や肩には砲。

“火薬庫”――そんな言葉が、リヒトの思考を過ぎった。

濃灰色の装甲は余りにも厚く、大きく、聳える。

頭部に配置された深紅のモノアイが、静かにグライNDERを見下ろす。

視線は、まるで死神の瞳のように冷たい。

『ビビッたか？怖気づいたか？だが、どうしようもねえ。これが現実だ』

ファウストの言葉は相変わらず軽い。

だが、その言葉すらも、どこか真実味を増していた。
純然たる力の象徴が、目の前に聳えているのだから。

『Arcana Machine 16 Babel! “塔”の
実力、身に刻みなア!』

*

*

*

「フェリア……質量差って、スゲエな。迫力がダンチ過ぎるだろ
……」

「ぼやいても始まらないぞ。アレを倒すしか、生き残る術は無い」
リヒトは呆然とした声を発しながらも、素早く操縦桿を倒した。
操縦者の動きをダイレクトに伝えるその操作性が、彼らの命を救
う。

先ほどまで居た場所には、吹き飛ばされた土砂が噴水の如く舞っ
ていた。

「ああ、クソ! あんなモン喰らったら死ぬだろうが!」

大きく横へと動いたグラインダー。

ばやきながら、リヒトは巧みに機体を制御する。

この時点でジョーカーマシン本来の二倍ほどの速度が出ていたが、動きにぎこちなさは見られない。

「このマシンの特徴は、運動性能だ。翻弄していけば攻撃を喰らうことは無いだろう」

「分かってる！」

このグラインダー、あまりにも動きが早い。

その制動に追いつけるのは、かつて“英雄”と呼ばれていた故のことだろう。

速さを三倍にまで上昇させ、グラインダーは地面を蹴った。

質量を持った暗緑色は、全体重の乗った拳をバベルに叩きつける。狙うべきは、防御力の脆弱な脚部関節。

だが――

「……こいつは、関節にオリハルコンでも使ってるのか？」

弾かれる。

巨大な装甲の合間に刺さった拳は、しかし、意味を成さない。

ファウスト本人もまるで気にした様子は無いことから、本当にダメージにすらなっていないのだろう。

『蠅でも止まったかア？』

不意に、バベルの装甲が震えた。

舌打ちしながら、リヒトは素早く判断を下す。

グラインダーは全速力で脚部装甲を蹴る。

「――やはり、かっ！」

せり出したバベルの装甲から、砲口が覗いた。

一瞬の邂逅の後に、放たれた砲弾は的外れの方へ飛んでいく。

「堅固な装甲に、全身に砲口。完全な防御馬鹿……!!」

『防御だけじゃないんだぜ?』

素早くグライNDERを立て直し、再び飛び退く。

一瞬遅れて着弾した弾が、再び轟音と共に土砂の噴水を作った。
リヒトは相手の攻撃を全て避けきる自信があった。

だが、攻撃力が無ければ倒すことは適わない。

急制動からの奇襲、狙いは背部の首関節。

打突、だが、弾かれる。

その隙を狙うように、装甲から這い出した砲口が火を噴く。

幾度かのやり取りを繰り返し、互いは一度、距離を取った。
今もまだ、バベルの山の様な巨軀は雄雄しく聳えている。

「埒が明かねえ……」

『同感だ。もっと攻撃力のある技ってのはねエのかよ?』

「確かに、武装の一つぐらいあってもバチは当たらねえ筈だぞ……」

眩くりヒトに、フェリアは断じた。

「無いな。男なら拳一本で闘って見せろ」

「テメエは死にたいのか? 馬鹿か? 先に死ぬか? あア?」

正気の沙汰ではない。

だが、フェリアはまるで気にした様子も無く、ただ前だけを見つめる。

「――信じろ」

「は？」

「機体を、そして、己を信じろ。今の私にはそれしか言えん」
「そいつは一体――っ!!」

リヒトが問おうとした瞬間、衝撃が走った。
グライNDERの近くに着弾した砲撃が、コックピットの中の二人を揺らす。

『相談事は終わったか？こっちも時間が無いんでな……手早く、行かせて貰うぜ？』

言葉に次いで、バベルの巨軀が動き出した。

鈍重そうな外見とは裏腹に、素早く、滑るように移動する。

その姿は這い寄る蛇にも似ていた。

「っ！クソ！」

回避行動を取りながら後退。

バベルはなおその身体を引き摺りながら、着実に距離を詰めていく。

「ゴキブリ野郎がっ!!」

『誰がGだって？飛び回るカトンボよオ!』

バベルの脚部、腕部、胸部に備えられた砲口が姿を現した。
まるで弾幕のような砲弾の雨。

だが、グライNDERの速度を捕らえることは叶わない。

冷静に回避した一方、リヒトはその実、焦っていた。
有効打を与えることが全く出来ていない現状、取れる選択肢は二つしかない。

——諦めるか、命を賭けるか、だ。

『オラァ！動きが鈍ってるぞ、カトンボ！』

未だ、砲撃を盾に暴れ回るバベル。

その強固な装甲の隙間を縫う一撃。

唯一、露出した部分で試していない一撃。

（砲撃直後の、胸部の砲口——）

だが、それは弾幕の雨を突破するということ。

お世辞にも褒められたモノではない、そんな戦い方。

グライNDERは愚か、パイロットすらも無事ではいられないだろう、真正銘の賭け。

だが、時は決断を迫っている。

「フェリア」

リヒトは、窺うように問う。

名前を呼んだだけ。

だが、そこには様々な意味が込められていた。
対するフェリアは、そんなリヒトを鼻で笑い。

「好きにしろ。私の命は、お前に預ける」

「そーかい」

リヒトは、静かに目を伏せた。

見開いた先の光景が最期となるかどうかは、自分の腕と――グライNDERに、掛かっている。

グライNDERを、己の腕を信じるほか無い。

ただ、それでは突破に足りない。

だからリヒトは、もう一つだけ信じる。

「フェリア、オペレーション任せた。出来るだろ？」

「……任せろ」

謎の女、フェリア。

彼女を信じることで、リヒトは全てのパーツが揃った感覚を得た。

フットペダルを操作し、操縦桿を握り、インフォメーションスクリーンへ目を走らせる。

全ての条件を確認して、リヒトは戦いを組み立てた。

“英雄”の戦略は、戦場で再び蘇る。

「シートベルトは締めたか？」

「後部座席には付いてないぞ」

「大丈夫、今日だけは赦して貰えるさ。今までの法規違反の暴走だって、赦されてる」

そのとき、リヒトの背後でフェリアが笑った。

少しばかり口の端が上がっただけの笑みだが、リヒトにはそれが分かっていて。

そして、それが少しばかり誇らしい。

「さーて、じゃ、行きますか。弾幕シューティングの始まりだ――」

――」

グライNDERの目に、灯が燈る。
決して困難に屈することの無い、力と誇りの光。
それは、“決意”という名の炎。

＊

＊

＊

静寂。

それは、戦いに身を置くものが最も警戒する一瞬である。

「何をするつもりかは知らないが、俺様に勝てると思わないこと
だなァ……」

バベルの全ての砲身を準備しながら、ファウストは警戒する。
近辺にグライNDERの反応は見られず、レーダーの範囲外に居る
のだろう。

武装は無いので狙撃などの警戒をする必要は無い。
その速度を活かしての特攻を仕掛けてくるであろう事は容易に想
像がついた。

飛んでくるカトンボを撃ち落とす。
その程度の気軽さで、ファウストは薄く笑った。

瞬間、緊張の糸が震えた。

レーダー上に静かに点滅する、通常の十倍はあろうかという速度のジョーカーマシンの反応。

間違いなく、奴だ。

「――ヒヤハハハハ！来たかッ！！」

笑いながら、全ての砲身の火器管制システムを起動した。

データを取得した管制は自動的に迎撃に最適な射線を構築していく。

砲撃の最も遠く、離れた着弾地点にグライNDERが差し掛かるとき、一発の砲撃が放たれた。

それを皮切りに、大量の砲撃が放たれる。

砲門は決して大砲だけではない。

機関銃、電磁銃、レーザー光、ありとあらゆる火器が一機を狙う。まるで光の奔流。

局地に対する圧倒的な砲撃こそ、バベルに隠された一面である。

「この弾幕！避けれるモンなら避けてみろやア！！」

たった一機の“カトンボ”を落とすためだけに、彼は本気だ。

だが、彼が“カトンボ”と呼ぶ存在は果たして何なのか。

それを知るのは唯一人。

勝者のみである。

＊

＊

＊

「発見された！攻撃が始まるぞ！」

「っ！やっぱ速度頼みじゃキツイか！」

フェリアの警告に、リヒトが舌打ちした。

通常のジョーカーマシンの十倍の速度とはいえ、レーダーに映る暇すらなく攻撃するのは不可能。

だが、その初撃は十分に攪乱できる。

「砲撃来るぞ！」

鋭いその声に、リヒトは躊躇わずに加速した。

前へと抜け出したグライNDERの遙か後ろで、派手な爆縁があがる。

それとほぼ同時に、グライNDERのレーダーには多量の攻撃予測が打ち立てられていた。

おおよそ、回避は不可能であろう程の量である。

「左へ避ける！バルカンの方がマシだ！」

「クソツタレ！！」

グライNDERが最高速を保ちながら、左へと滑った。

同時に、内部に居る二人に多大な衝撃が走る。

相対性理論によって破壊力を増した銃弾が、グライNDERの装甲を叩いた。

「っ!!」

「シートベルトが欲しいところだな……っ!!」

結果、装甲には多大な弾痕が刻まれる。

砲撃による爆風の煽りを受けながら、グライNDERは空間を奔る。左腕の制御が利かなくなっていた。

「だが!」

すぐ隣に走ったレーザー光に当たるよりは遥かにマシな損害である。

思い直して、リヒトは再び目の前を見据えた。

メインカメラが辛うじて捕らえたのは、時間旅行の最中のような光溢れる光景。

それら全てが致死性を持つ攻撃力の塊。

幻想的な風景に時折響く、硬質な残響音が不安を煽る。

「地上に降りろ! 高出力砲だ!」

「合点!」

返答と同時に、リヒトは目一杯加速させて機体を地上へと下ろした。

着地と同時に右足の調子がイカれたが、結果的には少ない損害で済んだのだろう。

グライNDERの真上を通る強大な光線を見て、リヒトはつくづく安堵した。

しかし、地上を走るには片足では不可能である。

故に今、地に足を着けず、持ち前の飛行能力で低空飛行している状態だが――

「クソ、爆風に煽られて上手く動かねえ！」

地上にほど近い場所は、爆風の影響を最も受ける場所だ。

ふらふらと、先ほどまでの半分の速度でグライダーは進んでいた。

気付けば、住処である洋館の麓だ。

隣で、一際大きい爆発が起きる。

「甘い！」

「待て、それは――」

避ける。

だが、しかし、その爆風に煽られた機体は確実にふらつく。

そこを狙って、一筋の煙が飛んだ。

対ジョーカーマシン用ミサイルが、死を撒き散らしながら迫る。

だが、リヒトは何でもないように笑った。

「俺に掴まってろよ」

「…………っ！」

言葉の真意を察し、フェリアはリヒトを後ろから抱きしめる様に掴まる。

がっちりとは、離れないように。

「飛ぶぞー!!」

次の瞬間、二人を襲ったのは無理にかけられた多大な重力負荷。足元で爆発したミサイルの爆風が、グライダーを無理やり空へと打ち上げた。

その際に両脚は壊れ、装甲が無残にも崩れていく。
だが、そんなことはお構い無しに、グラインダーは進む。
目標のバベルを、遙か高空から見下ろした。

「待ってろよ……今に、喰らいついてやる！」

『楽しみに待ってるぜエ、“英雄”サンよォ!!』

砲撃に一瞬の空白。

不意に繋がるノイズ交じりの声。

互いが、互いへと宣戦布告。

同時、不敵な笑みを両者が浮かべ。

『ここまで来れたらの話だがなアアアアッ!!』

ファウストが叫ぶ。

胸に開いた装甲の穴からは、巨大な砲身がせり出していた。

そこから放たれるモノは間違いなく、グラインダーを一撃で葬る。

「……ォ」

だから、リヒトは。

「オオオオオオオ——」

回避行動でも、防御行動でもなく。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ——
ッ！！！」

前進する。

踏み壊さんとする勢いでペダルを踏み、操縦桿は常に前進の一手。
見据える先には既に砲口の赤く染まったバベル。

愚直。

それは、愚直過ぎる突撃。

自暴自棄の神風特攻と言い換えても良い。

だが、リヒトには相討ちなどといった考えは毛頭無い。
あるのは一念。

——ただ、前へ。

既に手足は機能せず、自慢だった暗緑色の装甲は見るも無残に崩
れている。

通常の三十倍にも及ぶ速度の代価として、在り得ないほどの重力
負荷が二人を襲う。

だが、それでも、リヒトは速度を緩める事は無かった。

否、だからこそ。

リヒトは更に、限界を目指す。

「突き抜けるオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！」

刹那、リヒトにとって、世界がスローに流れた。
頭に血が上っているのが解る。

目を落とした速度計は壊れて、正確な表示を無くしている。
メインカメラに映るのは既に発射されたビーム粒子が、今、まさに牙を剥かんとする様。

だが、まだ手遅れではない。

リヒトは最初に乗ったときから感じていた。

この機体のポテンシャルを、余りある強大過ぎる力を。
だから、リヒトは信じる。

そのポテンシャルを、それを操る自分自身を。

「——ッ!!」

光が、メインモニター一杯に映る。

最早視界は光に包まれ、何も見えない有様。
だが、しかし。

リヒトは確信していた。

己と、グライダーなら越えられると。

刹那すら凌駕する、須臾しゅんに近い時間。

その間に、呟く。

「Arcana Over——」

それは逆転の鍵語。

常識を越え、人知を越え、全てを越える為の言霊。

如かして、グラインダーは。

「うおおおおおおおおりゃあああああああ
ああ!」

ビームを、縦に裂いた。

『——ッ!?!』

バベルから見れば、その現象は不可解に見えただろう。

まるで、ビーム自身がグラインダーを避けるように霧散していく
様。

ファウストの息を呑む音。

それとほぼ同時に、グラインダーの拳が放たれる。

「これでッ!」

突き立つ拳。

それは最早グラインダーを介し、リヒトの拳へと伝わっている錯
覚があった。

胸部砲のエネルギーが暴れ、グラインダーの右腕を蹂躪する。

それと同時に、バベル自身の内蔵機関も次々と破壊されていく。
連鎖的に崩れるバベルの鉄壁。

あと、一撃。

「終いだッ!」

もう一度、拳。

振りかぶった右腕の先の原型は無い。

が、気に入らない相手をぶん殴るにはそれで十二分。

突き立つ、二回目の拳。

一瞬の後、砲口から溢れたエネルギーが光を放った。

それは最期の抵抗か、グライNDERを吹き飛ばす。

「ざまあ見やがれ——」

そこで、リヒトの視界は、今度こそ真っ白のまま、閉ざされることとなった。

第二話 全力前進（後書き）

それなりにバトル。

次のロボットの登場はいつになるやら……。

第三話 ジョーカーマシン

がたがたと揺れる單車。

それもその筈、單車は人ですら通るのを憚るような獣道を突き進んでいるのだから。

常人では操作不能なレベルの揺れでも、英雄は淡々と乗りこなす。偏にそれはジョーカーマシンの操縦経験が好を奏した形であった。本人の顔は明らかに不満だらけの仏頂面であっても、だ。

「……絶対、狙ってただろアレは。マジで」

「何度言うつもりだ？既に聞き飽きたのだが」

恨み言を吐くリヒトに、冷たく声を返したのはフェリア。

彼の腰に手を伸ばしシートの後ろに座る彼女は、呆れたような調子だ。

「だってよ、俺の家がぶっ壊れされたんだぜ？そりゃ大したモンはねえよ？金も無事だし。けどな、家が無くなるっつーのは幾ら温厚な俺でも許容範囲外ってーか」

「女々しい」

フェリアは断じた。

既にこの問答も幾度繰り返されたか分からない。

——黒いジョーカーマシン、“バベル”との戦闘で、リヒトの屋敷は崩壊した。

敵機が逃げ去った後の戦場でリヒトが見たのは、焼け野原である。唯一の娯楽とも言えた裏庭の庭園が瓦礫に押しつぶされ、こげ跡

すら残っていなかったのは流石に可哀想なさまであった。

が、現実是非情にも、リヒトにホームレスという不名誉極まりない称号を与えたのである。

更に追い討ちをかけたのが、フェリアの存在。

デイブレイクから彼女を護るための手段“グラインダー”は、既にボロボロの体であり、修理を必要としていた。

最も、リヒト自身がこの『戦闘限りである』と見て酷使したのが問題であったのだが――

「とにかく！巻き込まれちゃった以上は全部ゲロって貰うぜ！？」

「ふむ。貴様ならこのまま逃げるかと思ったが」

「悪いが豪邸ぶっ壊されて笑ってられるほど俺は寛大じゃねエ。

次に会ったら絶対ぶっ殺す！」

自棄気味に叫ぶリヒトに、フェリアは淡々と言う。

しかしその声音はどことなく感心しているように聞えた。
が。

その理由自体は八つ当たりに近い。

というか、八つ当たりそのものである。

「まあ、理由は何でも良い。とにかく、私はこの“グラインダー”を護りたいのだよ」

言うところ、フェリアは撫でるように首にかけたネックレスを触る。

「私の息子も同然の機体を、変なことに使われては堪ったものではない」

「我が子オ……？テメエ、軍学者か何かか？」

当時のジョーカーマシンは一部の軍学者のみが開発を担当していた。

徹底的に情報規制され、乗り込む人間はその動力すらも知らないほどである。

それ故一般にその製造法が知れることも無かったし、無駄な戦火を招く火種となることを防ぐことが出来たのだ。

「確かに、広義では軍学者かも知れんな。まあ、そこらは置いておけ。とりあえず、今は“グライNDER”をデイブレイクに渡してはいけないということだけ知っていれば良い」

有無を言わさぬ口調に、リヒトはそれ以上に踏み込めなかった。否、踏み込ませなかったというべきだろう。

リヒトも勿論、これ以上の厄介ごとに付き合う気概は無い。

「で、要はデイブレイクの奴らが襲ってくるからそれからコイツを護れ、ってことだろ？」

「そういうことだ。ただ、くれぐれも大事にはするなよ？」

「へえへえ、分かりましたよっと……注文の多いヤツだな、オイ」

ぼやき、リヒトはバイクを走らせる。

既に屋敷のあった森を抜け、走る道も獣道からコンクリートの道路へと変っていた。

「んで、デイブレイクはいつたい、“グライNDER”で何をしようとしてやがるんだ？」

「ふむ……。それを話すには、ジョーカーマシンの成り立ちから話さなければならんだろう。長くなるが――」

「どうせ直ぐには辿り着かん。道中の子守唄みてーなモンだ」

単車を走らせ向かう先は、グライNDERを修理する設備のある場所だ。

そこまではまだまだ時間が掛かり、長話には調度良い。軽口を飛ばしたりヒトだが。

「寝るなよ」

「冗談を察しろ。いやマジで」

——この女、マジで扱いづらい。

思わずこめかみを押さえたりヒトに、後ろに居るフェリアは静かに話し始めた。

*

*

*

「信じらんねえ……」

フェリアの話が終わるやいなや、リヒトは呟いた。

それも仕方の無いことと言えよう。

今まで頼りにしてきた戦場の華、ジョーカーマシンの動力が“魔力”だ、などという荒唐無稽な話だったのだから。

彼女が言うには、ジョーカーマシンのエネルギーは“魔力”と呼

ばれる空気中の成分をエネルギー変換して使用しているらしい。
一般に浸透させなかったのは、国が利益を独占するためとも、単
に利用効率が悪いこともされていたという。

ただ、その情報が魔力の真贋を明らかにすることは無い。

しかし、リヒトは半分納得した気もあった。

何せ、“グラインダー”の出力は通常のジョーカーマシンとは桁
違い。

それこそ、規格外の代物であったからだ。

鋼鉄製の巨人を音速に近い速度で飛ばすのは、現代科学では不可
能であろう。

「マジで荒唐無稽だな、オイ」

「まだ、話は続きがある。“グラインダー”は、その核に特殊な
エンジンを積んでいるんだ」

「大方“魔力のエネルギー変換効率が低い”とか、そんな感じだ
ろ？」

「よく分かったな。その通りだ」

そのことに関しては、概ねリヒトも見当がついたらしい。

納得したような声音で言う。

グラインダーの特異さは、操縦した本人が一番分かっているのだ
ろう。

「問題は、そのエンジンが世界に限られた数しかない、というこ
とだ」

「なるへそ、そりゃあ争いも起きるわな」

あれほどのスペックを持つグラインダー。

戦時中になれば、どこの国もが喉から手を出してでも奪い取るだ
ろう。

そして、それを狙い暗躍する組織、デイブレイク。危険な存在である事は、既にリヒトも察していた。

「読めたぜ、テメエの経歴。概ね、エンジンを狙うデイブレイクから、同じくエンジン持ちのグラインダーを持って逃げ出してきた、って感じか」

「そうだ。デイブレイクの掲げる野望は……余りにも、危険すぎる」

「んで、その危険な野望ってのは一体？まさか世界征服でもやらかす心算か？」

「確かに、エンジンがあれば一国程度ならば落とせるだろう。だが、そんな生易しいものではない……」

いつものリヒトならば一笑に付す所であったが、既に当事者であった故に、半ば本気で問う。

しかし、フェリアは浮かない声音で言葉を止めた。

「じゃあ何だよ。もっと、世界的規模の野望ってのか？」

「……聞きたいか？」

続きを促すリヒトに、フェリアは躊躇いがちに一度だけ問う。だが、リヒトの腹は決まっていた。

「当然。既に俺ア当事者だぜ？俺にも、知る権利つつーのがあるだろうが」

「……そうか」

リヒトが初めて、この面倒ごとに自ら肯定する意見を出した。その理由は、決して子供じみた八つ当たりのためではない。彼の心に確実とされる理由は見当たらなかった。

が、強いて言うなれば、リヒトの腰に回されたフェリアの細い腕。それが、まるで不安を訴えるように力強く締め付けていたからであらうか。

フェリアが安堵の息を漏らした後、リヒトは腰に回された腕を叩いて続きを促した。

「奴らは新しい世界を創る気だ。22のエンジンを使ってな」

「世界を創る……正直胡散臭い話だが、マジなのかそれは？」

「残念ながら大マジだ。貴様の考えているものとは少し離れているかもしれないがな」

「ふーん……」

興味無さそうにリヒトが鼻を鳴らした。

「興味無いのか？世界の危機だぞ？」

「要は俺が“グライNDER”をデイブレイクに渡さなきゃいいんだろ？なら、起こらない。起こらないことを心配してもなあ……」

最早、不遜とも呼べるほどの大した自信だった。

しかしその表情には何ら揺らぎは無く、至極真面目に放たれた言葉であるのだろう。

それに頼もしさと危うさを感じながら、フェリアは呆れたように首を竦めた。

「それよりも、だ。22のエンジンってことは……」

「そう。エンジンは全て、タロットカードの大アルカナに擬えて作られている。数も合計、22だ」

「やはり、グライNDER起動の時のアルカナマシンってのは、そういうことかよ」

心の中の疑問一つ片付けると同時に、懸念も生まれる。

22のエンジンの一角、グラインダー。

前回の敵ファウストの駆るバベルもまた、アルカナエンジンを積んだものであろう。

でなければあの、物理法則を無視した空間跳躍は不可能である。

そして、未だ発見されない総計20のアルカナエンジン――

「ぞつとしねえ話だ」

「だろう？各地に争いの火種が残っているようなものだ。私はこれを除く為にダイブレイクを抜けた」

言うに易し。

しかし、その言葉の軽さからは分からぬほど、その行動は簡単ではない。

斥候としてジョーカーマシンを繰り出せるほどの組織を、一人で相手取るのだ。

並みの決意で出来る話ではない。

改めて、リヒトはフェリアと名乗る女をバックミラー越しに見た。長い白髪は日の光に煌き、その表情に変化は無い。

だが、その顔は出会ったときよりも強く、美しく見えた。

使命感――そんな安い言葉では表現できないほどの、重い決意。魂に刻まれたその誇りが、リヒトの魂にも火をくべたのか。

臆げながらもまた、リヒトも決意を固めようとしていた。

「仕方ねえな。リターンマッチのカードが組まれるまでは、俺も協力してやるよ」

そう宣言するリヒトに、フェリアは頷く。

「助かる」

と、一言残して、腰に回す腕できつく抱いた。

嘗て戦場にて孤独に戦ってきたリヒトにはそれが、とても暖かいものに感じられた。

*

*

*

目的地である場所は、再び森の中であった。

しかしその様子はリヒトの屋敷周辺とはうって変わり、しっかりと整地された森だ。

これが戦災の焦土の上に、人の手によって作られた森である事は記憶に新しい。

そしてその森を分割するように、一本のコンクリートの道が通っていた。

その先には、この地方の守護を担当する存在がある。

「地方守備隊機動兵器駐屯基地……本当に、大丈夫なんだろうな？」

「安心しろ、ここの隊長とはダチだ。グラインダーの情報は漏れねえだろう」

まだ訝しげな視線を送るフェリアに対し、飄々とその基地の廊下を歩くリヒト。

すれ違う人間が時々挨拶をしてこなければ、その言葉の信用性は欠片も無かった。

だが、目の前の存在は“英雄”。

第三次世界大戦の最大功績者なのだ、ということをフェリアは実感させられていた。

「それに、あわよくば協力が得られるかも知れねえぞ？」

「一体、どういうことだ？」

その言葉に、リヒトは笑って答えた。

「人間、お人よし過ぎるのも困りものってコトだよ」

言葉の意味が分からないフェリアは首を傾げる。

そうしている間にも、目の前を行くリヒトは廊下の突き当りで立ち止まっていた。

鉄の簡素な扉に掛けられたプレートには“隊長室”と乱雑に書かれている。

戸を二度叩き、リヒトは扉を開いた。

「―――久しぶりだな。大戦以来だから、ざっと半年か。しかし、いきなり女連れとは、やってくれる」

「そう言うなよ、ベルランド。俺だってんなことになるたア思わなんだ」

ぼやく男は、精悍な顔つきを一切崩さずにいた。

ぱりっとした軍服は新品同様であり、撫で付けられた黒髪もその

几帳面さを表すようである。

吊り気味の瞳の色は燃え上がるようなバーミリオン。

「改めて、我が基地へようこそ……“英雄”リヒト・シュッテンバーク」

「存分にサービスして貰うぜ。“猛禽”」

その名を、ベルランド・ヴィスビューと言った。

リヒトと同じく、第三次世界大戦中に多大な功績を残した一人である。

「……で、お前の後ろの御仁は一体？」

「あ？まあ、色々あるのよ。今は差し詰め、俺の依頼主ってトコか」

「依頼？探偵業者でも始めたのか？」

「始める訳ねえだろ。絶賛隠居中だったトコに、コイツが上がり込んできたんだよ」

「ほう、押しかけ妻、と」

「殺すぞテメエ。言っとくがアイツと何ら関係は無い」

「嘘吐け」

「マジ殺すぞ」

……だが、この会話が英雄二人の会話に聞こえるであろうか。ただ能天気はその日の話をしている学生と何ら変らない問答である。

フェリアは無表情に確かな怒りを浮かべると、問答を続けるリヒトの耳をつまんだ。

「……リヒト。いい加減にしろよ」

あまりにも冷たい一言に、リヒトは額に汗を浮かべて頷いた。
その声は戦場の誰よりも冷たい声だった——と、リヒトの言は
後世に語られている。

「本題なんだが……あー、それがだな。格納庫の隅と、ついでに
ジョーカーマシンの修理パーツを回して欲しいんだわ」

「何だど？ 何処かで戦闘したのか？」

驚きの声を上げるベルランド。

それをからかおうかと声を上げかけたリヒトだが、背後からのプ
レッシヤーにてそれを断念する。

言い淀みながらも、何とか続ける。

「そんなようなモンのような、そうでないような……。ともかく、
ジョーカーマシンを修理させてくれ。これじゃあ商売にならん」

「むう……暫し、待て」

言い、ベルランドは執務机に備えられた内線電話を取った。
恐らく格納庫の人間に連絡でもつけるのだろう。

——商売に、の件は完全にリヒトのアドリブである。

しかし、こう言った方がベルランドの協力を得やすい事は分かっ
ていた。

見た目や態度に反して、彼は情に篤く、困った人間を見捨てられ
ない性格なのだ。

卑怯な気もするだろうが、リヒトはそれを特に気にしていなかつ
た。

「一つだけ、条件を付けさせろ。貴様らが何を隠しているか。そ
れを話すことが、条件だ」

「オイオイ……何言ってんだよ。疑り深いヤロウめ……」

リヒトは困り顔で背後のフェリアを見た。

寡ばかりの沈黙があったが、フェリアは静かに頷く。

きつと、背に腹は変えられないようなものだろう。

リヒトはベルランドに、荒唐無稽なその話を語り始めた――

*

*

*

「はぁー……。今日はどっと疲れたわ……」

ベッドの上、リヒトは盛大に溜息を吐いた。

両手を後ろ手に組み寝転がる。

疲れた心身にその柔らかいマットレスは非常にありがたかった。

「まさか、殆ど知っているとはなあ……。俺だけ知らなかった、
つてのも癪な気分だぜ」

「仕方があるまい。それに、一般人であれほどの知識を持った人間は稀有だ」

ベルランドは、リヒトの話したダイブレイクの存在以外は知って

いた。

魔力のことも、それに伴って巨大な魔力反応が存在することすらも、だ。

それら全てを独自の趣味で解析した、というのだから手に負えない。

「昔から知識欲はハンパなかったが、あのレベルになると流石に引くわ……。人間って怖い」

「独自研究で魔力を明らかに出来る人間など、そうそう存在しないから安心しろ」

アルカナエンジンの存在もあり、ベルランドは想像以上に快くグライNDERの改修を受け入れた。

が、変りに提示された条件がある。

そのことを考えると、リヒトは再び憂鬱気に溜息を吐いた。

「模擬戦……ねえ。しかも、俺のグライNDERはまだ使えないんだろ？」

「私のグライNDERだがな」

模擬戦。

リヒトは、アルカナマシンを託すに相応しい存在かを試す、という建前だ。

が、実体はベルランドからリヒトに対する一方的な挑戦といっても良い。

何せ、戦時中は互いに腕を競い合った仲だ。

「勝っても負けてもいいんだ。気楽にやれ」

「しかしなあ……この基地にはつつーか、アイツの近くにはアレが居るからなア……」

アレ、というリヒトの言葉にフェリアが首を傾げる。
それとほぼ同時に、客室である扉のドアが激しい音と共に開いた。

「よーっすりヒト先輩！元氣してたまましたか！？」

「来たよ、ハイテンション小僧……」

ハイテンション小僧、と呼ばれたが笑う。

金髪ににきび跡の残る顔で、満面の笑みを湛えていた。

それはまるでハイスクールのお調子者、と言った風体だが、実際にそうなのであろう。

騒々しいその男に、フェリアは僅かに顔を顰めた。
なるほど、アレが、アレか。

「ハイテンション小僧なんて呼ばないで下さいよお、俺にはジョークって名前があるんですから」

「冗談は名前だけにしておけ……。んで、何の用だ？」

「へへ、実は明日、先輩とウチの隊長が模擬戦やるって聞いたんでねえ……！」

軍服の胸ポケットから、数枚の紙を取り出した。
チケットサイズの、長方形の紙である。

「明日の試合のベットっすよ！先輩の連れのねえさんに一枚差し上げようと思ひまして！」

「わ、私かっ！？」

話を振られると思っていなかったのだろう。

珍しく驚いた声を上げたフェリア。

そんなフェリアに近づき、ジョークはその手製のチケットを握ら

せた。

紙面に躍る文字は“リヒト・シュッテンバーグ”である。

「テメエ、いつもの事ながら人の戦いを勝手に賭けにすんなよ！」

「じゃあ、明日の試合頑張ってくださいよ！今回も俺、先輩に賭けてるんすからねっ！！」

言いたいことを言って満足したのか、駆け足でジョークは去っていった。

肩を怒らせるリヒトに対し、フェリアは笑っている。

「ちょ、テメエ、何がおかしい！」

「いや、貴様も存外、愛されているなど」

「誰がだっ！！」

そこで、リヒトは気付いた。

フェリアの笑顔を初めて見た事に。

いつもの無表情に比べて、その顔の何と可憐なことか。

まるで、無垢な少女のような、自然な笑み。

それを見て、リヒトは――

「くそっ！こうなりゃトコトン勝ってやろうじゃねえか！完膚なきまでに！」

言いながら、高らかに笑った。

フェリアの笑顔を見て機嫌を直したとしたのだとしたら、現金な男である。

かくして、“英雄”リヒト・シュッテンバーグのとある一日は終りを告げた。

日常は終りを告げ、新たに始まる日常。

そこに、リヒトは一体何を見、何を聞き、何を感じるのか。

彼の人生において、最も激動の一年が始まろうとしていた――

第三話 ジョーカーマシン（後書き）

説明回ってヤツです、ハイ。

次回思ったより早くバトれると思いますです、ハイ。

第四話 猛禽と英雄

『貴様、舐めているのか？』

「ンな訳ねえだろスカポントン。テメエにはこれで十二分だ」

クリアな音声通信の先で、“猛禽”ベルランドは静かに怒っていた。

それを分かりながら、リヒトは挑発するように声を上げる。

辺りは演習場と銘打たれた森の中の広場だ。

機動兵器が暴れても問題ないほどの更地は、既に荒野といって差し支えない。

近くには演習を観測する為の白い観測塔が建てられていた。

その中にはきつと、野次馬好きの軍人が大挙して押しかけているのだろう。

リヒトは、チケットをにやけ面で売り払うジョークの姿を幻視した。

どちらが勝ったにせよ、ジョークはきつと上手く立ち回るのだろう。

それが癪に思え、リヒトの心にはとある考えが浮かんだ。

「負ける気も毛頭ねえし、手加減する気も更々ねえよ」

『ふざけるのは言動だけにして貰おうか。ならば、その機体は一体何だと思っているのだ』

リヒトが乗り込んだ機体は、あまりにも無骨。

鉄色の四肢はずんぐりとした四角、頭部には赤いモノアイ。

まるでガラクタの寄せ集めの巨人は、俗に第一世代と呼ばれたジョーカーマシンだ。

格納庫の隅に眠っていた物を、リヒトが借りる形で持ち出した機体である。

それに相対するジョーカーマシンは、漆黒。

黒の装甲板の所々に走る銀色の線が威圧する。

巨大な剣の様な頭部から、二対の橙色が怒ったようにリヒトのトランプを睨みつけていた。

「第一世代ジョーカーマシン・トランプ。クッソ弱え雑魚機体だ」
『やはり、舐めてるだろう。そう、貴様はもう少し利口に生きたほうが良い』

ベルランドは大層お怒りのようで、口調がどんどん刺々しくなっている。

しかし、リヒトにはこの展開こそが望んだものであった。

彼が“クッソ弱え雑魚機体”を選択した理由は二つある。

一つは、現状のようにベルランドの頭に血を上らせるため。

ベルランドはお人よしの真面目人間だが、同時に、生粋の武人である。

武人は、戦士として侮辱されることを極端に嫌う。

見よ、彼の怒り様を。

「それに、この機体なら幾らぶっ壊してもいいだろ？」

もう一つの理由。

その言葉の意味は彼にしか分からない。

『もういい。貴様と問答するのは時間の無駄だ。後悔しても知らんぞ』

「ハッ、誰が。テメエこそ、御託並べてねえでさっさと掛かって来な」

旧友と呼ぶには險悪で、怨敵と呼ぶには程遠い。

それでも、一触即発的な空気の中、二機のジョーカーマシンは一斉に構えた。

『行くぞ』

冷たい声と共に、漆黒の巨人――ベルランドのジョーカーマシンは上腕を捻る。

腰だめに構えられた五指の間に、煌く刃が見えた。

ジョーカーマシン専用の大型ナイフ。

それ即ち、ベルランドを“猛禽”たらしめる“爪”であり、“嘴”。

鋭く、一点を狙った突きが放たれる。

「っ！」

空気の抜け出るような音と共に、リヒトは素早く動いた。

卓越した操縦技術が間一髪、猛禽の爪を回避することに成功させる。

無論、虚空を貫いた爪による横薙ぎの追撃を回避することも怠ら

ない。

しかし、猛禽の攻撃は一度や二度では終わらない。

『ちょこまかと……!』

ベルランドの攻撃を回避するため、リヒトのトランプは高空へと跳んでいる。

猛禽はその爪を手首のスナップだけで投げつけると、すぐさまに新たな爪を腰から取り出す。

そして、自らの投げたナイフに追従するように跳んだ。

「そんな攻撃、痛くも痒くも――」

リヒトは迷わず、左腕を犠牲にナイフを防御した。

その左腕を振り回すように、空中で錐揉み回転をする。

「ねえんだよッ!」

『な……!?!』

そのまま、左腕をベルランドの持つナイフへと叩き付けた。

弾かれた八本のナイフが宙に舞い、同時に、トランプの無骨な左腕も舞う。

呆気にとられた声を残して、ベルランドの機体は上体を煽られて吹き飛んだ。

これ幸い、とばかりにトランプは着地、距離を離す。

『相変わらず無茶苦茶だな、貴様は』

「けっ! テメエも随分ご機嫌な機体に乗ってんじゃねえか!」

『第二世代ジョーカーマシンに独自の改造を施した、言わば“第

三世代ジョーカーマシン”だ。負ける道理は無い』

「それに対して、俺のジョーカーマシンは第一世代……ってか。燃えるじゃねえか」

『こちらとしては、弱いもの虐めをしている気分なんだがな』

やれやれ、とでも言うように漆黒の機体は首を振った。

『“第三世代ジョーカーマシン”……“キリング”は、未だ不敗。仕方ないと言えば仕方ないのだが』

「悪いな、第三世代の不敗神話はここまでだ」

『ほざけ……！』

リヒトの減らず口に合わせて、キリングは飛び込む。

その両手には変わらず、鋭い銀色の爪を覗かせていた。

鋭く、低く踏み込んだ。

差し詰めそれは、肉食獣の構え。

ランプの足元から、掬い上げるようにナイフの光条。

対するランプは、右足を高く振り上げた。

「潰れろ！」

右足とジョーカーマシン用ナイフ。

二つの兵器が火花を散らし、互いを潰そうと拮抗、磨耗する。

先に折れたのは――右足。

「くそ！整備サボってたろコレエ！」

『整備は欠かしていない。我らが整備兵を愚弄するな』

言葉と同時に、バランスを崩して倒れたランプに追撃をかける。
次の動作は、飛翔。

両手に持った四対八本のナイフを煌かせ、上空に踊る。
太陽を背にした姿、まさに猛禽。
その爪は獲物を挟み、引き千切る。

『おおおおおおおっ!!』

「クソツたれ!!」

組み付けられるトランプ。

四肢には既に満足な戦闘力は残ってはいない。
胴体にはがっちりと片手のナイフが食い込み、ちよつとやそつとでは離れそうに無かった。

だが、リヒトはこの程度では動じない。

その証拠に、コックピットで彼は笑っていた。

獰猛な、獣のような笑みである。

ベルランドが違和感に気付いたときには、既に組み付いた後。
戦いの間にできる、独特な“溜め”とも呼べる空気。

「喰らえアホンダラァ!」

トランプに残された右腕。

この模擬戦に挑むに際して唯一追加した兵装。

超短距離にして、絶大な威力を誇る。

その兵装の前に、全ての防御は無意味と化す。
武装の名は――

「パイル」

貫く。

その一念だけで、右腕の武装は放たれる。
しっかりと組み付いてしまったキリングに、避ける術は皆無。

『うおおおおおおおおおッ!!』

だが、ベルランドは吼える。

全力で後退しようと、負けてなるものかと、叫ぶ。

決して諦めぬ、武人としての誇りが、彼の機体を動かそうとしていた。

しかし。

「――バンカあああああッ!!」

一切の容赦無く、右腕の武装は漆黒の装甲を貫く。
燃え、橙色に染まった装甲片を撒き散らし、キリングはその場で踏鞴を踏んだ。

『貴様……! 最初からこれを狙って……!』

「近接攻撃に頼り過ぎる節があるからな、テメエは。それが分かればあとは簡単よ。秘儀・やられたフリ……ってか?」

『屁理屈を……!』

リヒトは、最初からこの一撃に賭けていた。

圧倒的な性能差を埋めるには、パイロット自身の慢心を突くしかない。

故の、第一世代ジョーカーマシン。

結果は、見ての通り――

「言っただろ。テメエの不敗神話は俺との“相打ち”で終わりだ。

俺も負けてはいないぜ？」

何よりも、トリヒトが続ける。

「ジョークの掌で踊らされるのは御免だね。相打ちが一番、上等な結果だ」

『…………馬鹿だろ、貴様』

ベルランドは、諦めたように溜息を吐いた。

＊

＊

＊

「払い戻しはコチラです…………はい、コチラ払い戻しになりやります…………」

がつくりと肩を落としたジョークは、観測塔の隅にいた。軍人に売り払った紙切れを再び回収する作業に追われている。心なしか、その金髪もへたったようにも見えた。

「なるほど、確かに勝ったな。模擬戦にも、ジョークにも」

「それってどういう意味っすかぁ！こっちは商売上があったりですよぉ！」

呟くフェリアに、形無しといった体でジョークは泣きついた。

「昨日アイツは完膚なきまでに勝つ、と言った。詰まり、ベルランドには負けず、貴様に儲けさせないのが勝利条件」

「ってことは……」

「相打ちという結末が、一番貴様が儲からないことを知っていたのだな」

講釈するフェリアに、ジョークは再び声を上げた。

「そりゃあ嫌がらせじゃないっすか！そんなんねえっすよぉー！」
「まあ、自業自得ってヤツだな」

納得するように頷くフェリア。
無表情ではあるが、その心はいつもよりも穏やかなものであった。
だが、その折。

「緊急警報！緊急警報！」

観測塔内にサイレンの様な音が響いた。

「な、なんなんすかぁ！？」

「5時に10000の距離から熱源反応！この反応は――」

狼狽するジョークの声に応えるかのように、オペレーターの一人在声が上げた。

「電熱反応……！？」

訝しげな声に、ただ一人、フェリアが反応する。

「レールガン……完成させていたか、デイブレイク……!!」

「何だって!? レールガンだと!?」

その驚きが周囲へと伝播していく。

まるで蜂の巣を突付いたような騒ぎの中、ジョークだけはただただ目を丸くしていた。

「アネさん、レールガンってまさか……!」

「電磁加速で鋼鉄の弾を放つ銃。恐らく、貴様の想像通りの代物だろう」

「じゃあ……遠距離狙撃!?」

ジョークの顔からさーっと血の気が引いていく。

在り得ない筈だ、だって、レールガンは——その言葉がジョークの口から飛び出すことは無かった。

この時代、レールガンを製造する技術は未だ生まれてはいない。

だが、一般人の知らない要素——魔力を用いることで、それは秘密裏に実現していた。

尤も、それを知るのは魔力の存在を知る一部の科学者のみであったが。

「発射予測シーケンス、カウントダウン!」

「隊長に通信繋げ! 早くッ!」

喧騒の中、髭面の男の怒声が響いた。

一つずつ減っていく発射までの猶予、果たして何を理解しろと言うのか。

ようやく通信が開いたときには、残り三秒を切っていた。

「隊長！避けて下さい！！」

髭面の男の声は届いたのか。

その答えを知ることなく、管制塔の面々は視界を襲う白色に目を閉じた――

*

*

*

『――隊長……けて――さい……！』
「……ッ！？」

コックピットには、ノイズ交じりの酷く焦った声が響いた。

それが己の部下の声で、ベルランドは狼狽する。

満足に動かないキリングで、それでも何とか回避しようとした。

「っ！！」

が、動かない。

胸の直下に穴を開けたジョーカーマシンは、微動だにしなかった。
微かに制御の利く腕を、コックピットの前で構えた。

銀色のナイフは総て取り落としてしまっている。

己の命を護るのは、漆黒の装甲板のみ。

そう思っていたベルランドの前に、立ち上がる影。

ボロボロの体。

左足だけで器用に立つ機体。

第一世代ジョーカーマシン・トランプと、その搭乗者リヒト。

「馬っ……!!」

叫ぼうとした時にはもう遅い。

蒼い光の奔流が、トランプの肩越しに見えていた。

圧倒的な質量。

そして、圧倒的な速度。

進路の総てを破壊する、一筋の禍星。

「鹿野郎っ!!」

だが。

ベルランドは見る。

立ち上がったトランプから発せられる、ただならぬ“白い障壁”。

比較的大型なジョーカーマシンであるトランプの身体を包んで、
なお収まらないこの波動を。

言わば、それはバリア。

白銀の盾が、この場の二人を護るように展開された。

それはこの場に在り得ない筈の力。

この場にフェアが居たのならば、驚いたのであろう。

その反応は、彼らが“エンジン”と呼ぶ存在を起動したときに訪

れる光。

『A r c a n a O v e r——!!』

刹那、聞えるはずの無い、リヒトの雄叫び。

守護の鍵語。

護るの一念で開放される、魔力の力。

それはあらゆる存在総てを不貫とし、護れるモノは無いと語る。

その証拠に——見よ、その後姿を。

「……………！」

トランプは、その場に立つ。

威風堂々と、その片足立ちのままで。

消し飛んだ荒野の中央に、護るべき者を引き連れて。

リヒト・シュッテンバーグは、倒れない。

『生きてるか？ “猛禽”』

人を小馬鹿にするような調子で、言う。

聞きたい事は多かったが、それでも、ベルランドはこの言葉を選んだ。

「助かったぞ…… “英雄”」

＊

＊

＊

「レールガンを放った輩は取り逃した。目撃者の話によると、突然“空間の割れ目”に消えたらしい」

「つつーことは、やはり……！」

「間違いない。デイブレイクの仕業だろう」

リヒトの言葉に、フェリアは同意を返した。

レールガンを製造し、尚且つ、“空間の割れ目に消える”不可解な現象を引き起こせるのはデイブレイクのみ。

リヒトは、耳朵に響く軽い声を幻聴する。

「撃ったのは黒くてデカイ機体か？」

「いや、報告によれば、白い翼を持った機体だと聞いたが」

「ucci、ファウストの野郎じゃなかったか」

半ば本気で悔しがるリヒトに、ベルランドが冷徹な視線を送った。それを尻目に、フェリアは考え込むように目線を下ろす。

「“正義”……グレイヴキーパーか」

呟いた。

その声音にはどこか恐れのようなものがある。

「正義……ってことは大アルカナの八番。また、アルカナエンジ

ン搭載型かよ」

「……これで、敵に二機目の強敵が確認された訳だな。他にも居るのか？」

ベルランドが警戒するように言う。

フェリアはリヒトの頷きを見ると、再び口を開いた。

「私の知るところで実戦投入されているのは“女教皇”、“正義”、“塔”。使われてはいないが所持を確認しているのが“運命の輪”だな」

「うへえ、三機も居んのかよ」

吐き捨てるようにリヒトは言った。

一機だけでも戦力のバランスを崩壊させる機体が、三機。

そのいずれも敵という現状に、誰もが頭を痛めていた。

だが、一人だけが静かに顔を上げる。

「この大陸の東端に、ハルピュイアという街がある。そこには魔力研究に付き合ってもらった知り合いの科学者が居るんだが」

それがどうした、とばかりの視線と、意図を読めない冷徹な視線。二つの視線が刺さり、一息置いてからベルランドが言う。

「そこには新たなエンジンがある。俺も現物を見た。今も、その科学者が管理している筈だ」

「マジかよ！　つかそんなアッサリ見つけられて大丈夫なのかよ！　？」

「……つくづく驚かされるな。幸運の神にでも惚れられているのか？」

二者二様の驚き様を呈する二人。

しかし、当のベルランドは興奮も無く、至極淡々と事実を述べる。

「フェリア。君には少尉相当の権限をやろう。アルカナエンジンについて、調査しに行ってきたくれ。バックアップは、全責任を持って俺が担当する」

「助かる」

短い言葉を返すフェリアに、ベルランドは満足そうに頷いた。

横目でリヒトを見ると、期待と不満が入り混じった珍妙な表情をしていた。

「俺は？」

「貴様にやる官位は無い。強いて言うならば——“お手伝いさん”なんかはどうだ？」

「オイ、マジで屋上来い。大体、何で俺じゃなくてコイツの方が上なんだよ」

文句をつけるリヒトにベルランドは、敵わないとばかりに両手で耳を塞いだ。

納得のいかない顔をしているリヒトの肩にフェリアの手が置かれる。

「まずは落ち着くことだ。貴様の今の言動こそが“お手伝いさん”であると知れ」

「はあ？ 意味わかんねえ」

「そういうことだ“お手伝いさん”。分かったら、さっさと行ってきたくれ」

「けっ！わーったよ！人使いの荒いヤツだぜ……」

リヒトは面白く無さそうに鼻を鳴らして、隊長室を出た。

「アイツは戦えるが、多少性格に難がある。子守、頼まれてくれるか」

聞えないであろうと高をくくりつつも、ベルランドは言う。

それは貴様も同じでは——言いかけて、フェリアは言葉を飲み込んだ。

「悪いが、保障しかねる。アイツは一人で勝手に飛び出す“馬鹿”だからな」

「ああ、分かっているとも」

ベルランドの言葉を背に、フェリアはリヒトの後を追って部屋を出た。

その姿を見て、ベルランドが口の端を上げる。

「“英雄”が変人なれば、その友もまた“変人”か……。存外、様々な人間に見つめられているようだぞ、“英雄”よ」

狭い隊長室では、ベルランドの押し殺した笑いが響いていた。

第四話 猛禽と英雄（後書き）

予定していたプロローグ的なパートが終わりました。
次回から多少、毛色の違う感じになるかもしれません。

第五話 吹雪の夜に

同緯度に存在しながらも、ハルピユイアはリヒトの居た地域よりも寒かった。

それは山脈を隔てた北風が吹き降ろし、この盆地となった場所に寒さを齎しているせいでもある。

季節は秋の終り口であり、粉雪が積らない程度に降っていた。

「寒い……マジで、寒イいいい……」

そんな中、リヒト・シュッテンバーグは歯の根も合わない様子だった。

がたがたと震える身体には、いつも通りの暗緑色のコートのみである。

「“英雄”ともあろう者がだらしない。兵士の時に贅沢は言ってもらえなかった筈だろう」

吐き捨てるは、階級上は“少尉”となっているフェリア。

黒いコートの前を開け放っているにも関わらず、一切、彼女は寒がる様子を見せなかった。

「ジョーカーマシンのコックピットは空調が付いてるんだよ……」

！寒い外に生身で出た事は無いっつの……」

「軟弱者め」

「五月蠅え……勝手に言ってる……」

リヒトは再び、現地で買ったマフラーに口元を埋めた。

そもそも、この地方が寒いなどは聞いていなかった――と、リヒトは主張する。

防寒着の一つも無い格好で、この時期を歩くのは身体に悪い。

自然と早まる脚が、目的地に急ぐ。

一刻も早く暖を取りたい。

その一念で既にリヒトの頭では地図が出来上がり、目的地に辿り着くを今か、今かと心待ちにしていた。

既に心此処にあらず。

故に、リヒトは気付いていない。

「ところでリヒト。先に行くのはいいのだが、目的地が分かっているのか？」

「ああん？ 当たり前だろボケ。こっから先へ直進して……アレ？」

リヒトは周りの町並みを見渡すと、近場にある道路標識を見つけ、歩み寄る。

その青い標識を見つめる内に、見る見るとリヒトの顔まで青くなっていく。

一方その事実を先んじて知っていたフェリアは、その様子を淡々と眺めていた。

そこにある感情は“呆れ”。

何故なら、彼女は決して寒いわけでは無いからだ。

「マジかよ……通り過ぎたとか……」

絶望した声でリヒトが呟いた。

「貴様はもう少し、日常生活での観察眼を磨くべきだろう」

「……………」

返す言葉も無く、リヒトは己の踏みしめた雪の足跡を辿っていく。その後ろを、呆れたような目のフェリアが追った。

——歩くこと、更に二十分半ば。

リヒトが歩くことに疲れを感じてきたところに、それは見つかった。

「……マジでここか？本気か？ベルランドの野郎、嘔吐いてんじやねえよな？」

「違うと、信じたいところだが……今回ばかりはお前に同意だ」

何故、リヒトが目的地を見失ったか。

それは、彼が道中にそれらしき物を見つけられなかったことにも一因がある。

“猛禽”ベルランドに渡された目的地を記したメモ。

そこには『ウエマツ研究所』と書かれていたのだが——

「ただの、アパートじゃねえか」

その実、住所にあったのは小汚いアパートメントであった。

築何年かすら分からないコンクリートの壁は、塗装が剥がれてボロボロ。

錆だらけの梯子に、荒れ放題の裏庭を見るに、それは廃墟として認識されていてもおかしくないほど。

「ま、まあ待て。地下研究所とかかも知れんぞ」

珍しくうろたえた様子のフェリアが、フォローをする。

訝しがるリヒトは、それでも渋々、といった体で敷地へと入り込んだ。

——その瞬間である。

「隙アリだ、侵入者っ!!」

「ぐおうッ!？」

リヒトの顎に、上昇志向の拳骨が入った。

揺れる脳髄、込み上げる吐き気と痛みに耐えながらも、リヒトは何とか正面を見ることに成功する。

そこに居たのは、珍妙な少女。

「むう、コレに耐えるとは中々にタフネスだなっ!だがあ!」

栗色のショートボブに揺れる、ネコミミ。

白と黒の色彩鮮やかな、メイド服。

場違い、そう、あまりにも場違い。

「これでっ!」

素早く、少女はステップを踏んだ。

左右へとダッキングしながら繰り出される、華麗なアップー。寸分違わずに、リヒトの顎に今一度直撃。

「オネンネだよっ!!」

その声を最期に、リヒトの意識は途切れた。
糸の切れた人形のように後ろへと倒れ込む。

その様子を見ていたフェリアは、その様子を欠片も気にすることなく言った。

「ここは、ウエマツ研究所で良いのか？」

「そういうアンタ様は誰なんだい？マフィア的な人なら、二人仲良くオネンネして貰うけどさっ！」

「私はフェリア。そこで無様に転がっている男はリヒト。ベルランドに要請を受けて来た」

少女は品定めするようにフェリアを眺めた。

その挑発的な視線を気にもせず、フェリアは胸元のポケットから紙を引き出す。

ベルランドが直筆した紹介状だ。

少女はそれを受け取って一瞥すると、それをぼいと捨ててしまう。

「なーるほどねー！ベルランド様が言ってた助っ人ってのはアンタ様達か！確かにここは、ウエマツ研究所！アンタ様達の目的地だよ！」

少女はくるとその場で回ると、備え付けの階段へと歩き出した。
エプロンドレスの裾が可憐に翻る。

「付いて来るといいよ！御主人に会わせてあげるからさ！」

それだけ言うと、まるで山猫のような軽業で階段を昇っていく。
少女を追おうと一歩踏み出しながら、フェリアは思わず呟いていた。

「……御主人？」

*

*

*

改めて室内を見渡せば、そこにあるのは何の変哲も無い男の部屋だった。

しかも、中は男の私物であろう、漫画雑誌やPCソフト、ゲーム等が無造作に転がっており、お世辞にも綺麗な部屋とは言えないだろう。

そんな部屋の中、転がっていた物を適当に避けたスペースに、リヒトラ二人は座っていた。

部屋の主はその対面にある椅子に座り、不敵に笑む。

「で、御主人——ウエマツってのは、アンタか？」

「そう、僕がここの研究所の所長、コージ・ウエマツだ」

コージ・ウエマツと名乗った男。

シャツは緩く、髪は伸び放題のものを後ろで束ね、銀縁眼鏡もずれたまま。

ずばらな性格が目に見える上に、肉体は少々肉付きが過ぎるものがある。

リヒトは幾日前にテレビで見た“オタク”なる人種を思い出し

ていた。

言われてみれば、ウエマツの名前は“オタク”で有名な極東の島国でのスタンダードな名前である。

「アンタらは？」

「リヒト・シュッテンバーグ。アンタらみたいなのは“英雄”って言った方が分かり易いか？」

「ふーん」

「ふーん、ってお前……」

「私はフェリアと言う。こいつの保護者みたいなものだ。そっちの少女は？」

がつくりと肩を落とすリヒト。

それを無視して、フェリアが話を進めようとする。

ウエマツの視線で促されて、メイド服の少女が平らな胸を張った。

「アタシはフー！気軽にフーちゃんって呼んでね！」

「無い胸張るなよ。惨めに見えるぞ？」

隣でぼそりと呟いたウエマツの後頭部を叩きながら、フーは満面の笑みで言った。

その珍妙な関係に、彼らの力関係はありありと分かった。

だが、未だ二人には分からないことが多すぎる。

「そのメイド服は一体何なんだよ？」

「御主人の趣味だよ！」

「では、そのネコミミは？」

「僕の趣味だが？」

「じゃあ、何で御主人って呼ばせてるんだ？」

「趣味」

綺麗に重なる二人の声に、リヒトは大きな溜息を吐いた。
どうにもこの二人、両者共に変人らしい。

「……関わりたくは無 い二人組みだな」

「……全く以って同感だぜ」

小声で呟くりヒトに、フェリアが同調した。

己の部屋にメイド姿の少女を囲み、ご主人と呼ばせる、自称研究所所長。

当の本人はさも当たり前であるかのようにとっかかりと座り、足元に落ちていた漫画を手にとって読み始めようとしていた。

今は遠くに居るベルランドを恨みながらも、リヒトは話を切り出そうとする。

「んで、俺達の目的だが……さっきの様子を見るに、ベルランドから話を行ってるのか？」

「先日、電話が来たよ。まあ、僕が直接電話を取った訳じゃあないんだけど」

「アタシが取ったよ！」

ぴよこぴよこと揺れながら、フーは朗らかに笑っていた。

その頭をウエマツが撫でようとするが、髪に触れる前にその手を叩き落とされている。

「じゃあ何で俺を攻撃したんだよ！」

「うーん……怪しかったから、かな」

「……ウエマツさんよ、アンタんこの番犬はちよつと凶暴すぎると思わないか？」

リヒトが話を振ると、ウエマツはフーの顔を横目で見た。

その時二人の目が合うが、とてもドラマティックなものではなく、むしろ、殺伐としたものであり。

冷や汗を流しながら正面に向き直り、ロボットのようになぎこちなく頷いた。

「そりゃあ——禁則事項の質問だな、ウン」

「まあ、そんな事はどうでもいいんだ」

フェリアが場の空気を戻そうとする。

リヒトはもう少しフーに言いたかった事がありそうだが、渋々と話をする態勢へと戻った。

「私達が遠路遥遥ここまでやってきたのは、“エンジン”の調査をする為だ」

「——アルカナエンジン。“魔力”をエネルギー変換する脅威の物質」

「そのアルカナエンジンを狙う組織が居る。その組織に対抗する為。そして、あわよくば壊滅させるためにも。それらの所在を知り、手中にすることが求められる。」

「成る程、それで僕が見つけたエンジンを使って、実験でもしようっていう事かい？悪いが、僕はもう実験はしないことにしたんだ」

「そりゃあ、また、どうしてだ？」

「そこまで君に話す義理は無いと思うがね」

リヒトは聞きたそうな表情をしていたが、フェリアによる無言の圧力で再び口を噤んだ。

「とにかく、エンジンの無事を確認するだけでもいい。協力して頂けるだろうか、ウエマツ所長」

「エンジンを狙う組織……ねえ」

考え込むようにウエマツが唸った。
リヒトが首を傾げる。

「何だ？ 心当たりでもあんのか？」

「いや、まさかその組織って、マフィア的なものじゃあないよな？」

「マフィアあ？ 一体何の関係が？」

「近頃、よく此処の近辺を見回っているようだからね。もしかしたらな……と」

「はっ！ そもそも、そんなちゃっちゃい組織がジョーカーマシンなんて用意できるかよ」

だよなあ、と独り言のように呟くと、彼は天井を仰いだ。
再び考え込むウエマツに、何なんだよ、とリヒトが続ける。
答えを待つことなく、フェリアは得心したように口を開いた。

「概ね、事情は理解した。恐らく子飼いの組織か何かにやらせているのだろう」

「子飼いだ？ デイブレイクってのはそんなにデカイ組織なのかよ？」

「推論に過ぎないが、恐らくそうだろう」

フェリアの推論に、ウエマツが苦心の表情を浮かべる。

「参ったな……監視されているんじゃない、アルカナエンジンを回収できない」

「アルカナエンジンは一体何処にあるんだ？」

「連中のような奴に手に渡ってはならないと思って、とある場所

に隠したのさ。こうなると分かっていたら君たちに手渡したんだが……」

「直ぐに、取りには行けないのか？」

「取っている途中で横取りされるのが目に見えるからね。デイクブレイクってのは相当強力な組織みたいだから、それこそ、ジョーカーマシンを使ってでも止めにくるだろうね」

一応、修理の完了した“グライNDER”を持ってきてはいる。

しかし、それを起動するのはあくまで最終手段であり、そうしないことがリヒト達には求められていた。

「じゃあ、俺達はどうするんだよ？ここまで来て、何もしないで帰るのか？」

「ベルランドが動かなければ、どうにもならなさそうだ。私達はここで連絡係とならざるを得ないだろう」

言うやいなや、フェリアは携帯電話を取り出しながら玄関へと歩いていった。

早速ベルランドに報告する気なのだろう。

律儀な女だ、と思いながら、リヒトはふと辺りを見回した。

何かが足りない。

そう、居た筈の存在が足りない、違和感がある――

「大変だ！」

フェリアが声を張り上げながら、再び部屋へと戻ってきた。

何事かとリヒトは思いながらも、嫌な予感は禁じえなかった。

「フーが、メモを残してマフィアに勝負を仕掛けに行ったようだ！」

「さっき“周囲を監視している”っていうマフィアどもか……！」

二人は顔を見合わせた。

幾らリヒトを倒すほど強いとは言え、少女である。

マフィアなどという治外法権に生きる男を相手にすれば、ただでは済まないだろう。

「俺達も行くぞ！」

リヒトは素早く決断し、玄関へと向かった。

頷きながら、フェリアもそれに従う。

だが、それよりも彼らの前を駆ける影があった。

「ウエマツ!？」

「あの男、いつのまに……」

ウエマツは既に玄関の扉を蹴り開け、二人の視界の外へと姿を消そうとしていた。

その速度たるや、とてもその身体からは想像も付かないほどである。

「追うぞ！」

「クソっ！待てよウエマツっ!!」

二人も一瞬遅れて走り出し、“ウエマツ研究所”からは人が居なくなった。

外に降る粉雪は、その勢いを強めつつある――

*

*

*

「フェリア、そっちに居たか!？」

「駄目だ。そちらは？」

「何処にも居やがらねえ!クソ!ウエマツは!？」

雪の降りしきる中、二人は息を上げつつも走っていた。

すでに搜索を始めて一時間、そう大きくは無い街であり、通りは殆ど見回った。

既に日も落ち、辺りは夜闇である。

だが、フーは影も形も見当たらない。

「警察とか、そんな感じのヤツに頼れねえのか!？」

「大事にすれば、即座に感づかれるだろう。フーが人質にされている可能性もある」

「クソったれ!!」

リヒトは悪態を吐き、再び足を動かす。

二人が訪れていない場所は一箇所を残すのみ。

併走して五分ほどの位置にそれはあった。

「ウエマツ!!」

街の外れにある墓地。

そこにある慰霊碑の前に、ウエマツは立っていた。

「フーは居たか——っ!？」

リヒトは言いかけ、口をつぐんだ。

ウエマツがその手に持っていたのは、ネコミミのバンド。

フーが身に着けていた筈のものである。

「……ご丁寧に、奴らは手紙まで残してあったよ」

ウエマツがネコミミバンドを握るのは逆の手に、力なく一枚の紙を握っていた。

リヒトはそれをひったくり目を通す。

そこにあったのは、概ね予想されていたケースと一致していた。

「フーを人質にして、アルカナエンジンと交換って訳か。汚え連中だ」

忌々しそうにリヒトが呟く。

フェリアも、その表情には確かな怒りが浮かんでいた。

ただ、ウエマツだけは——まるで虚無のような、色を失った顔つきであった。

「フー……」

粉雪はいつしか、吹雪になっていた——

第五話 吹雪の夜に（後書き）

もつとサクつと終わらせる予定が、思ったより長引きそうです。
申し訳ない。

第六話 家族ということ

「……………うあ」

薄暗い空間で、少女は目を覚ました。

まず気付いたのは、両手を縛られ、身動きが取れない状態で地面に転がされているという事。

そして、周りの状況を把握しようと思いい瞼を開いた。

だが、辺りを見渡せど、そこには闇しかない。

「ようやく目覚めたかよ？それとも、餓鬼はもう寝てる時間だったか？」

男の声は空間に響いていた。

粘着質の、厭な響きを持ったその声は、少女に嫌悪感を与える。

暗闇の奥から現れたのは、黒いスーツの男だ。

「アンタは……っ!？」

「自己紹介しようか。俺はテメエらの持つてる“ブツ”を有効活用しようと考えている一派さ。なあ、ウエマツ研究所のクソ餓鬼さんや」

その言葉に、少女——フーは、無意識に下唇を噛み締めた。

思い出したのだ。

如何にして、この屈辱的な状況に置かれる羽目になったのかを。それと同時に、後悔していた。

何故、自分はこうも短絡的なのか――

「黙り込んでれば悪くない“商品”なんだがなア……如何せん、品がねえ」

「何ですと？このアタシに、品が無いと？立てばバクヤク、座ればカタン、歩く姿はヤケノハラと言われたこのアタシが？」

「一個もあつてねえじゃねえか……」

溜息と共に言い、疲れ顔で肩を摩った。

そこには未だ痛みを訴える青痣があり、男はフーを見下し、睨む。

「まったく！阿呆みたいに暴れる所為でウチのメンツが使い物にならねえじゃねえか……怪力の餓鬼め！」

「ちよつと待ちなよ！まさかその“怪力の餓鬼” ってのはアタシのことかい！？」

「テメエ以外に誰が居るっつーんだよこのクソ餓鬼ツ！！」

今はこうして縛られているフーではあるが、事実、彼女はマフィアグループを後一步まで追い詰めていた。

迫る男達を千切っては投げ、千切っては投げを繰り返すその姿は、まさに鬼神と言えよう。

リヒトを倒したその実力は伊達ではなく、しかし、一步及ばなかったということ。

「いいから黙ってろや。明日になれば、愛しのウエマツ先生に会わせてやるからよ」

その言葉の意味を、フーは一瞬で理解した。
詰る所自分は、人質なのであると。

「アンタ……汚いよ！男なら正々堂々、胸を張って戦いな！」
「これが俺たち“大人”の戦い方よ！餓鬼は黙って、ままごと遊びでもしてな！」

ま、これがある限り俺達は——そんな言葉を放ち、男は愛しそうにそれを撫でた。

釣られるようにフーが目をやる。

そこには、巨大な人型の影。

忘れもしない。

フーの故郷を、父を、母を、総てを奪い去った巨人の姿を。

「ジョーカー……マシン……！？」

「第二代ジョーカーマシン、ソードが四機。幾ら相手がアルカナエンジンだろうと……！！！」

フーには理解できない言葉を発しながら、男が恍惚した笑みを浮かべる。

その姿を見て、フーは嫌悪感を覚える。

まるで、得体の知れない生物を見たかのような、背筋に来るそれである。

「アンタは……どこまでっ……！！！」

「勝って、アレを手に入れさえすれば、過程なんてどうでもいいのさ。そうだろ？」

睨むフーを見下ろし、男は笑みを浮かべていた。

しゃがみこみ、フーの顎を持って視線を無理やりに合わせる。

「恨むなら、あのウエマツって男を恨め。あの野郎が再三の要請に応じないから悪いんだからな？」

「アンタに……！アンタに、御主人を愚弄する権利は無いよ！御主人を馬鹿に出来るのはアタシだけさっ！」

その言葉を、男は鼻で笑った。

興味を無くしたかのように首を振り、男は呆れの目線をフーに投げやる。

「もういい。もういいから、寝とけよ。な？」

言い放ち、片手で持っていたその頭を無造作に落とした。頭を打ったショックで、フーの意識は断絶する。

最期の一瞬まで考えていたのは、誰でもない、唯一人の男。

「御主人——」

男が去ってそれきり、暗闇に声が響くことは無かった。

*

*

*

「これは、僕への罰なのかも知れないな」

降りしきる吹雪は冷たく、人の心まで冷たくしてしまうようだった。

しかし、その場に居る二人の心は熱く、怒りに燃えている。

反面、立ち尽くすウエマツの心は、凍ってしまったかのように鈍い。

「……かつての僕は、軍属の科学者として雇われて、ジョーカーマシンの研究開発をしていたんだ」

だからだろうか、彼が独白したのは。

それは決して、他人には語ろうとしなかった彼の過去。

「当初は楽しかった。好きな機械弄りが出来て、金が貰えて、祖国も繁栄する」

「ああ、そうだな。それが“正常”だ」

皮肉交じりに、リヒトは呟いた。

戦争に関わってきた者同士、何か通じたものがあるのかもしれない。

「ある日、母の居る故郷が市街戦に巻き込まれたって報せが届いた。僕は急いで故郷へ戻ったさ」

故郷。

それが何処かはリヒトには分からなかった。

が、この街では無いであろうことだけは、ウエマツの表情から、確かに感じ取っていた。

「あったのは母の亡骸と、戦争で壊れた町並みだけさ……。僕は、戦争に加担していたことを初めて実感したんだ」

「だから、軍を抜けたと？ ジョーカーマシンに関わっていたなら、そう簡単に抜けられる筈が……」

「僕は精神病に掛かったんだ。辛い……本当に辛い日々だった」

当時の彼を知る人間なら、今のウエマツを見てさぞ驚くのであるう。

精神病を患っていた当時は、栄養失調で倒れるほどに痩せこけた姿だったのだから。

「軍を抜けて、精神病院に入院させられた。何とか治療して、軍に戻れと言われたとき、僕は逃げたんだ」

「追跡は？」

「幸いにも、見つからずに逃げ切れた。当時は第三次世界大戦も一番激しい時期だったしね」

ふう、とウエマツが一息吐いた。

白い蒸気が黒々とした闇に浮かび、瞬く間に消えていく。

しかし、その間にもフリーは、何処で何をされているのかすら分からない。

焦ろうともしないウエマツの姿がまどろっこしく、リヒトは苛ついた表情を浮かべた。

「この街に辿り着いて一番最初に出会ったのが……フリーさ。そして、彼女は戦災孤児だった」

「引き取って、育てた……か」

フェリアの言葉に、ウエマツは頷くこともしない。

だがそれが真実であろう事は、何よりも、最初に出会ったフーが証明していた。

同時に、フーにとって、ウエマツにとって、互いがどう思っているかすらも。

「テメエ、罪滅ぼしの心算か？」

「ああ、そうさ。僕の、戦争に関わっていた罪を償えるのはこれくらいしか――」

言いかけたウエマツの頬を、リヒトの拳が打った。

薄く積った雪の上に倒れる姿を、リヒトは肩を怒らせて見下ろす。

「ふざけるなよ。テメエ、まさか、本当に罪滅ぼしだ、なんて思ってたんじゃないだろうな」

「ぐ……罪滅ぼし以外の何があるって言うんだい？　こんな、最低最悪の男に」

卑下するウエマツを睥睨して、リヒトは怒りの形相を浮かべた。

「フーを助けたいいのか、助けたくないのか？　それとも、もうどうでもいいのか？　どれだ」

リヒトの言葉に、倒れたままのウエマツは唇を小さく振るわせた。それは、決して寒さに負けたわけではない。確信し、リヒトはもう一度問う。

「助けたいのか！？　助けたくないのか！？」

「……助けたいに、決まってるじゃあないか」

返答は小さく、消え入りそうな声だった。

ウエマツは倒れ、俯いたまま、肩を震わせる。

「助けたいに決まってる……。フーは、たった一人の僕に残された“家族”だ……」

「テメエ、今、“家族”つつたな？」

リヒトはしゃがみこみ、ウエマツの襟を引っ張って顔を向けさせる。

同じ目線で、静かに涙を流す瞳を見据えた。

「“家族”を助けたいって事には、“同情”だとか、“罪滅ぼし”だとかは関係ねえハズだ。テメエはそいつを言い訳にしていただけだよ。テメエの一方的な“罪悪感”のな」

言い放ち、リヒトはその手を離した。

再び雪上に項垂れるウエマツに背を向け、言う。

「だがな……テメエが家族だと思ってるフーは、誰でもないテメエの助けを待っている。その為には、俺達も協力は惜しまねえ」

だから、と、続ける。

「立て。振り返らず、前だけを見とけ。フーは、その先に居る筈だ。お前の“過去”には、もう誰も居ない」

数瞬後、ウエマツは乾いた笑いを漏らした。

涙の跡が残る顔を、そこらに積った雪でごしごしと擦る。

「悪かったね。どうにも……僕は、精神的に弱いらしい。フーにはあんな格好させてるのにね。僕の趣味で」

「はっ、全く、その通りだよ」

リヒトの差し伸べた手を、ウエマツが握る。

もう片方の手には、しっかりとネコミミバンドを握っている。

まるで、二度と離さないと誓ったかのように、固く、固く、信念の如く。

立ち上がると、二人は頷きあい、横目でその人を見た。

「つてことで、作戦説明は任せたぜ。フェリア。どうせ何かあるんだろ？」

「ようやく喋れたと思ったら、そんな役回りか……やれやれ」

大げさに首を振って見せて、嘆息。

その姿にリヒトは苦笑し、ウエマツもにやついていた。

「これは……メイド服を着せなくなるね——おうツ!？」

直後、脛を押さえて転げまわるウエマツを尻目に、フェリアは説明を始めた。

「いいか？ 今回のフー奪還作戦だが……コイツを使う」

言い、懷から取り出したのは、少々大きい携帯端末だ。

その用途を知るリヒトは、驚いたような顔をする。

「グラインダーを呼ぶ携帯端末？ テメエ、マフィアの野郎を殲滅する心算かよ？」

「その心算だが？」

さらっと言うフェリアに、リヒトは啞然。

彼女はそれを見捨てて続ける。

「作戦の肝は“相手を騙し切ること”、だ。それを肝に銘じて、作戦に当たって貰いたい」

が、その前に、と、フェリアは提案した。

「一旦研究所に戻るぞ。ウエマツが……死にかねん」

「……そうだな。戻るか」

リヒトの後ろでは、脛を押さえたまま体の半分ほどが雪に覆われたウエマツが転がっていた。

第六話 家族ということ（後書き）

戦闘まで書く中途半端に長かったのでここでカット。

次回、ウエマツ編は終われ……たらしいなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2516y/>

22ジョーカー

2011年11月26日19時54分発行